44 東京都　町田市

鶴見川源流

水源	導水方法	導水箇所	水環境上の問題
地下水・湧水	自然流下	池・堀	親水性・景観

※地図中の破線枠は次ページの地図範囲

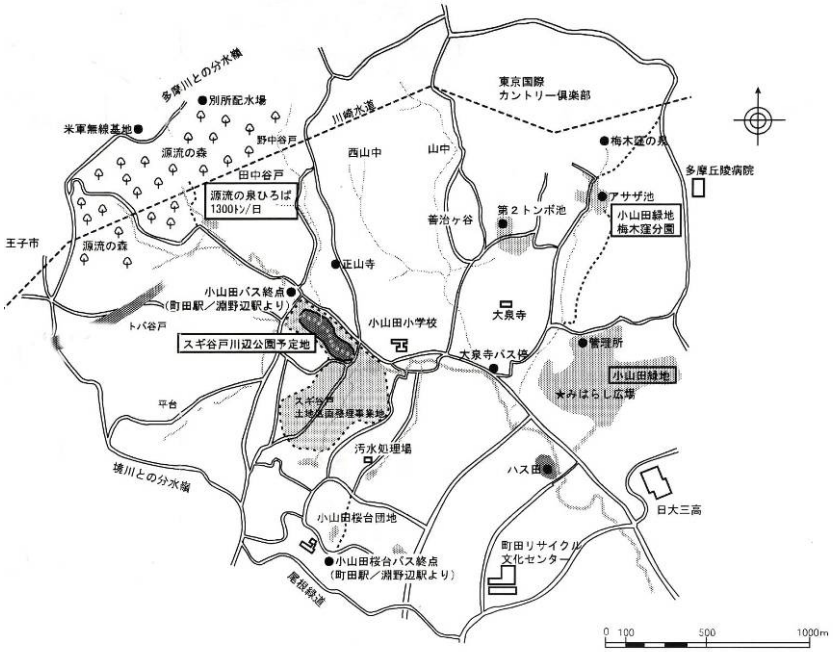
対象地域の概要	**・地域の概要** 鶴見川源流域の 970ha は町田市北部丘陵と呼ばれ谷戸田を中心とした農業が営まれていました。都市基盤整備公団（現　独立行政法人都市再生機構）は、最源流を含むその一部で、多摩ニュータウンに続く宅地造成を計画しましたが、平成 15 年７月に事業の中止を決定、町田市がそのあとを受け「農とみどりのふるさとづくり」としてまちづくりを推進することとなりました。 その源流域の中心部に位置するのが「泉のひろば」がある約 70ha の田中谷戸で、中央部の湧水（源流の泉／源流泉のひろば）を起点に、下手には幅広い谷地形（中央の谷）が展開し、上手には北の谷（北の入り谷戸）、源源流の谷戸（長谷戸）、中央上手の谷（溜まり池の谷戸）、南の谷（芦田谷戸）が配され、２次河川に対応する２次の小流域となっています。中央上手の谷の一部を除き地形、森ともに残っています。 **・水環境上の問題**：水質悪化・悪臭、生態系悪影響、親水性・景観

導水事業の概要	**・事業の概要** 鶴見川の最源流域は、町田市上小山田地区の 300ha 規模の山林・田園地帯で、最大水源である、平常時に日量 1300 トンを湧出する源流の泉（湧水：現「鶴見川源流泉のひろば」の地域）と周辺の谷からの絞り水も併せ、鶴見川の源流を形成していました。平成元年 1 月、近くを通る川崎市の水道用トンネルの改修工事が原因で源流の泉が枯れる事態に到り、地元の市民団体が魚類の救出を行うとともに、川崎市、町田市に緊急対応を要請するなどの取組みにより、泉の保全に成功しました。 その後、町田市は平成６年湧水の保全・活用及び源流域の紹介等を目的として、市民要望を入れ設計した「鶴見川源流泉のひろば（2,000 ㎡規模）」を開設し、以降市民団体と協働で管理を行っています。 **・目標** 湧水の復活・貴重動植物の保全・源流訪問や源流啓発の拠点 **・水源** 湧水 ［理由］ 枯れていた湧水の復活と水生生物の回復拠点としての保全ならびに日常管理が必要と判断されたため

導水事業の概要		＜参考情報＞ 現在の水源は、古来から付近の谷戸に自噴していた大量の地下水が、昭和 20 年代末の川崎水道トンネルの築造によって余掘り部分に集水されてしまったため、トンネル工事のための横坑から分水したものと考えられます。泉の水源そのものについては、確定的には解明されていませんが、深層からの加圧地下水が起源ではないかとも推定されます（NPO 法人鶴見川源流ネットワーク　理事長：岸由二慶應大学教授からのヒアリング） **・費用** ［負担主体］ 設備等にかかわる基本的な管理及び大規模な植生管理などは町田市下水道部が行っています。 日常管理を担当する「泉のひろば水辺生物管理会」は、現在は NPO 法人鶴見川源流ネットワーク、カワセミ応援団、鶴見川源流自然の会で構成され、おなじく鶴見川源流ネットワークに参加する他の地元グループの総合的な支援も受けつつ、第２日曜日と第４日曜日の月２回、10：30～12：30、定例の管理作業を行っています。内容は、泉の清掃、ビオトープの整備と管理、周辺の草刈作業、生きもの調査、野外水族館の実施などです。 これらにかかる経費の一部は、初期においては河川環境管理財団からの助成金、また近年は市の報奨金等でまかなわれていましたが、現在は、全額市民団体の負担で実施されています。助成金事業等ではないため泉の広場の管理だけに限定した収支はとりまとめられていません。 ［補助制度］ なし
NPOとの協働	協働の背景	＜問題の地域における認識＞ ①　平成元年 1 月、近くを通る川崎市の水道用トンネルの改修工事が原因で鶴見川源流の泉が枯れました。 ②　市農政課に田植えなどの農業用水として利用してきた農家から苦情が寄せられました。 ③　「町田の自然を考える市民の会」（以下、「市民の会」という。）ならびに鶴見川源流自然の会は泉が枯れて用水に水が流れていないことを発見し、水生生物の絶滅を危惧しました。 ＜対応策の検討＞ 「市民の会」は地元市である町田市と川崎水道管理者である川崎市に対して、湧水回復と動植物の保護を申し入れました。町田市は川崎市水道局と協議を行いました。また、「市民の会」は、地元の「鶴見川源流自然の会」や鶴見川流域諸団体と連携して「鶴見川源流の渇水によるハヤなどの緊急救出作戦」キャンペーンを実施しました。 ＜解決＞ 平成２年１月、水道用トンネルの改修工事が終了し泉の湧水が復活したことを確認。その後、「市民の会」などが、町田市に対して泉の部分の土地の保全を要望して実現。以後は自然保護に留意しながら、町田市が、鶴見川源流ネットワークに参加する市民団体の構成する「泉の広場水辺生物管理会」と連携して泉の広場を管理しています。※一部は買収、ほとんどは借地。 ＜現在までの活動などの流れ＞ 鶴見川源流ネットワーク（市民の会の拡大発展組織）は、従来より源流自然公園構想を提唱しており、一部は「鶴見川源流泉のひろば」ならびにその源流部にひろがる「鶴見川源流保水の森」として実現しています。現在は、源流ネットワークに参加する３団体（NPO 法人鶴見川源流ネットワーク、カワセミ応援団、鶴見川源流自然の会）が「泉のひろば水辺生物管理会」を構成し、月 2 回の定期的な泉の管理作業を継続しています。 ＜協働の内容＞ 協働的な歩調のもと、川崎市と町田市に対して問題解決の要請を行ったのち、自治体と協働して泉の湧水の復活を実現。その泉を中心とした「鶴見川源流泉のひろば」を提案、実現（1995～）し、以後、町田市と協働して、月２回の定期的な管理作業を行っています。
	役割分担	・町田市：設備等にかかわる基本的な管理及び大規模な植生管理など。 ・泉のひろば水辺生物管理会（鶴見川源流ネットワークに参加する NPO 法人鶴見川源流ネットワーク、カワセミ応援団、鶴見川源流自然の会で構成）：第２日曜日と第４日曜日の月２回、10：30～12：30、管理作業を行っています。内容は、泉の清掃、ビオトープの整備と管理、周辺の草刈作業、生きもの調査、野外水族館の実施など。

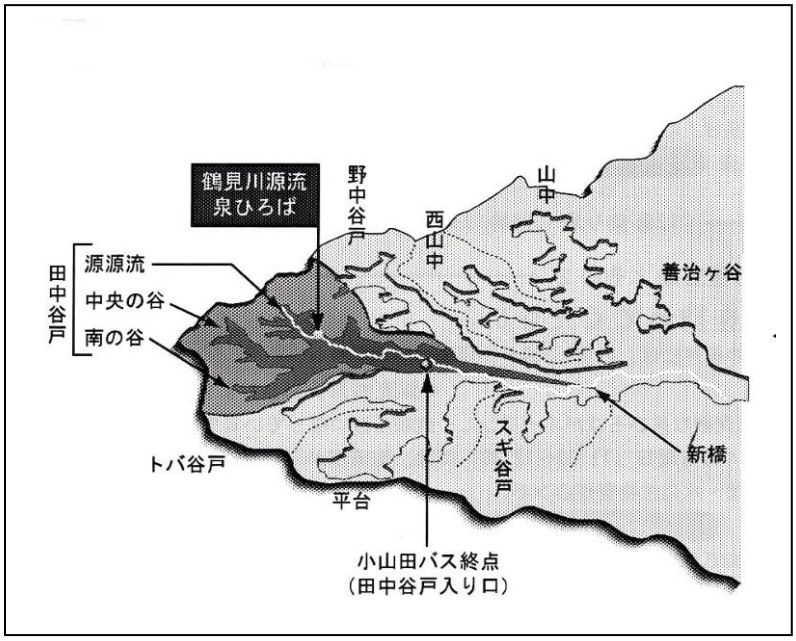
NPO との協働	成功要因	・町田市が鶴見川の源流都市であるという認識を持ち、その責任を自覚していたこと。 ・「市民の会」（平成 15 年解散。事業や歴史は「鶴見川源流ネットワーク」に引き継がれている）や、「鶴見川源流自然の会」（現在は「鶴見川源流ネットワーク」の構成団体）などが、提案・要望ばかりでなく、流域諸団体の応援も得ながら、自ら保全管理作業に関わってきたこと。
今後の課題		町田市と市民団体の連携は大変良い関係にある。鶴見川源流部を中心とする町田市北部丘陵の「農とみどりのふるさとづくり」に関して、どのような役割を相互に果たし協働して行けるかが、今後の大きな課題となる。
資料提供及びヒアリング先		町田市下水道部 NPO 法人鶴見川源流ネットワーク／NPO 法人鶴見川流域ネットワーキング 岸由二（慶應義塾大学経済学部教授・両法人の代表）

鶴見川源流域

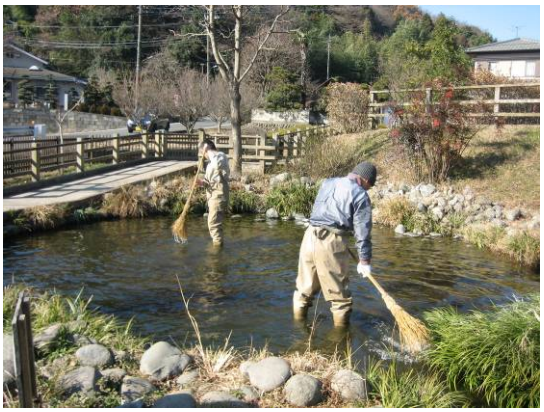


資料：鶴見川源流ネットワーク資料「源流域を知っていますか？」

鶴見川源流域（田中谷戸と泉ひろば）



資料：鶴見川源流ネットワーク資料「源流域を知っていますか？」



住民による維持管理活動の様子